

1. 概要

【主担当部局】群馬県教育委員会特別支援教育課
（県立特別支援学校担当）

【主な関係部局】群馬県教育委員会義務教育課
（公立小学校担当）
玉村町教育委員会
（公立小学校担当）

【自治体 本事業関連URL】
<https://www.pref.gunma.jp/soshiki/227/>

本事業の 目的	【当該地域におけるこれまでの課題】 ・令和5年4月、文部科学省「効果的かつ効率的な巡回指導の実施に向けたモデル構築事業」を受託し、行政区を超えた通級による指導を実施し、地域の巡回指導の体制構築に関する実践研究を行っている。 ・令和5年7月、知事2期目の基本政策として、障害がある子もない子と同じ場所で共に学ぶインクルーシブ教育を推進するためのモデル校設置の方針が掲げられた。
	【本事業を通して達成を目指す目標】 ・小学校等と特別支援学校において、障害のある子とない子が共に協働的に学ぶことと、一人一人に応じた個別最適に学ぶことが両立するよう柔軟な教育課程や指導内容等を開発する。

学校運営 連携校	特別支援学校	小・中・高等学校
	群馬県立伊勢崎特別支援学校 （R6児童生徒数）小：117名、中：62名、計179名 （障害種）知的障害	玉村町立上陽小学校 （R6児童数）258名

カリキュラム・ マネージャー	【配置人数】 3名	【主な経歴】 ①元県立特別支援学校校長、②共愛学園前橋国際大学短期大学部教授、③群馬大学教授
	【本事業における役割】 CM①：伊勢崎特別支援学校に配置し、両校を定期的に訪問する中で交流及び共同学習の授業づくりを牽引。両校の職員に対する研修や交流及び共同学習の授業づくりに当たって活用できるツールの開発に取り組んでいる。 CM②③：連携協議会に参加して取組に対する助言を行ったり、国内外の取組について紹介したりし、取組をバックアップしている。	

連携協議会	【構成人数】 13+α名	【開催回数】 5～6回	【外部専門家】 カリキュラム・マネージャーが兼ねているため、特になし
	【連携協議会において検討・議論した主な内容】 ・両校の状況や県による事業説明等情報共有。 ・交流及び共同学習計画検討。交流及び共同学習の授業づくりについての検討。 ・どんな授業を目指すかのイメージづくり。		

2. 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

交流及び共同学習の発展の方向性・ねらい

- ・ 小中学校と特別支援学校の教員がそれぞれの授業スキルを活かしながら、多様な児童生徒と一緒に学べる授業づくりに取り組む。
- ・ 活動は一緒にでもそれぞれ異なったねらいを持ちながら、主体的に授業に取り組める学習環境作りに取り組む。

実施内容

①

対象学年:	伊勢崎特別支援学校小学部3年と上陽小学校知的特学1～4年
回数・教科:	計4回（図工3回、生単1回）
主な内容:	図工: いも版画、絵本の紹介（鑑賞） 生単: 図工で取り組んだ絵本の紹介活動を中心に、お互いが作った作品などを通して交流を深める活動

指導内容・指導方法の工夫

- ・ 最初は「お互いについて知る」ということを重視した活動内容を設定し、zoomを使ってリモートで始め、お互いを認識した状態で対面授業を行った。
- ・ 取り組みやすいことから今年度は「図画工作」の授業を中心に行っている。
- ・ 今年度は、知的障害特別支援学級との学習を行い、来年度以降、通常の学級も交えた学習に取り組む。
- ・ 岩手県が作成した「交流及び共同学習ガイドブック」に掲載されている打合せシートを参考に、両校教諭による打合せを行った。

交流及び共同学習の成果

- ・ 授業実践に取り組んだことで、一緒に学習するときの留意点等に気付けた。
- ・ 教員が授業をコントロールするのではなく、活動の中で児童同士に任せる場面があった方がよいことが分かった。
- ・ 子供たちはお互いにとても楽しみにしている様子が見られた。



対面授業の様子

3. 現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

教員や専門スタッフの配置等の工夫

- ・ 小学校の特別支援教育コーディネーターが両校を行き来できるよう、後補充教員を1名加配。
- ・ カリキュラム・マネージャー配置型1名を特別支援学校に配置。両校の橋渡しとして活躍している。
- ・ 臨床経験豊富な大学教授2名をカリキュラム・マネージャー派遣型として委任。これまでの研究成果等の知見を連携協議会で共有。

学校運営連携校間の一体的で専門性を生かした指導体制の構築

- ・ 配置型カリキュラム・マネージャーが両校で職員研修を実施することで、小学校では障害に対する理解、特別支援学校では小学校の教科教育に対する理解が深まった。
- ・ ニか月に1回連携協議会を実施することによって、学校運営協力校、カリキュラム・マネージャー、教育委員会等行政機関が、現状と課題について情報共有することができ、それぞれの立場でできることを自発的に考えながら進めることができています。

各学校運営連携校における校内体制の構築

- ・ ブロックチーム担任制：低中高2学年ずつのブロックとし、担任が定期的に入れ替わるシステムを導入し、子供が多様な大人と関われる環境を作る。
- ・ 校内支援室「YUMEルーム」の新設：多様な困難を抱える児童がいつでも教室から離れて利用できる部屋を設置。
- ・ 特別支援学級と通常の学級による交流及び共同学習の促進：本人の希望に応じてなるべく通常の学級で授業が受けられるような体制作りに取り組む。

教員研修の実施

- ・ 小学校でカリキュラム・マネージャーによる視覚障害者の感覚を体験する研修を実施した。また、視覚障害を有する芸術家による視覚以外の感覚を生かしたアート活動に関する研修を実施した。職員からは、「これまで想像もしなかった世界について知れてよかった」という感想が出ていた。
- ・ 研修ではないが、総合教育センターで行う法定研修受講者を対象にインクルーシブ教育に関する意識調査を実施。また、モデル校小学校でも別の意識調査を実施。



校内支援室「YUMEルーム」設置



障害者のアート活動に触れる研修

4. 課題と展望

令和6年度事業における課題

【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討】

- ・ インクルーシブな授業を行うに当たっては、授業の中で子供たちに預けたり任せたりする時間が多いとよい。もっと自由度の高い授業を目指せるとよい。
- ・ 授業を行う教室の環境整備や教材・教具の設定等学習環境について、整理していく必要があることが分かった。

【現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方】

- ・ 今年度は授業実施回数や交流及び共同学習対象児童数が少なかったことから、有償ボランティアの募集を限定的にしていたため、登録者が少なかった。
- ・ 上陽小に教員1人を加配したが、なり手が見つからず、夏休み明けの配置になってしまった。
- ・ 小学校に配置されている町費職員もいるため、授業内での役割分担について整理が必要。

令和7年度事業の展望

【交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討】

- ・ 6年度に取り組んだ内容を踏まえ、小学校通常の学級と知的特別支援学校の児童同士による教科学習での交流及び共同学習の授業づくりに取り組む。
- ・ 小学校児童と特別支援学校児童それぞれのねらいを明確にし、児童個々がそのねらいを達成するための学び方を自ら選択できるような授業づくりに取り組む。その際、複数の学び方から選択できるような学習環境整備を行う。

【現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方】

- ・ 小学校と特別支援学校の各担任がTTを組み、町費職員や有償ボランティアとの役割分担を整理した授業を実施。
- ・ 有償ボランティアの募集先を増やす。